

成長、学ぶ機会を

奪わないように

中野小で
吃音学習会

支援の在り方考える



皆川さん(正面)の体験や内藤さん(右)の説明を聞いて理解を深めた学習会

県特別支援教育研究連盟
難聴・言語障害教育部会の
第1ブロック(飯山小・中
野小・須坂小)は16日、中
野小学校で吃音学習会を開
いた。

吃音は、言いたいことが
頭に浮かんでいても言葉が
スムーズに出せない症状。
一般的に「どもる」ともい
う。須坂市以北にあたる同
第1ブロックでは2011
年度から、吃音のある子ど
もたちを支える大人、児童
が集える機会をと学習会を
開いている。

このうち大人の会には、
言語の面で心配のある子ど
もが通う「ことばの教室」
に吃音で通級する児童の保
護者、関心を持つ教員、保
育士、保健師、入学前相談
に関わる教育委員会担当者
らが参加。神應透析クリニ
ック(松本市)の言語聴覚
士・内藤麻子さんと吃音の

ある皆川裕己さんを講師
に、対話しながら吃音につ
いて学び考えた。

内藤さんは、吃音の話し
方や進展、子どもたちとの
接し方など、実例を交えて
説明。その中で、発言の場
で「代わりに言っしてほしい」
「あてないでほしい」とい
う意思表示は「その場にい
たい」「自分の役割を果た
したい」という思いでもあ
るとし、「気持ちを受け止

特別視せず自然に

皆川さんは当事者の視点
から、小中学生時代の授業
での発言、受験や就職での
面接、一人暮らしに関わる
電話での手続きなど、社会
人になるまでの体験談や悩
んだことについて語り、「話
すことへの不安が年齢を重
ねることに大きくなり、人
生の選択を狭めてしまっ
ていたように思う」「苦しい
のは発した言葉そのもので
なく、言葉に詰まった自分
を責めたり、これから発し
たい言葉が出ないかという
不安」と吐露。

吃音のある人との接し方
や支援について、理解する

め、ただ、その子がやらな
くていいのではなく、その
子の成長、学ぶ機会を奪わ
ないように」と支援のボー
ントや配慮について助言。
子どもへの愛情から先回り
や前のめりがちな言葉かけ
を少しこらえ、共感を大切
に子どもを信じて温かく
見守ること、その子自身
が言葉を紡ぐ経験を積ませ
ることも大事と説いた。

人が周囲にすることが心強
く「どもる話し方には待っ
てもらうことと、せかさな
いでほしい。特別視せず自
然に接して」。また、当事
者自身も「小さな頃から吃
音について話し、辛い経験
でも話したり付き合い方を
模索していくことが大事。
吃音があっても話してきた
経験は自信にもなる」と語
った。

これに内藤さんは「吃音
のある人だけが苦労するの
でなく、安心して一緒に生
きていける社会づくりが大
切では」と参加者に呼びか
けた。